

東洋文化研究所紀要 第142冊

平成 15 年 3 月 抜 刷

ヴァーストゥナーガに関する考察

森 雅 秀

ヴァーストゥナーガに関する考察

森 雅 秀

1. 密教儀礼と建築術

ヴァーストゥナーガ (vāstunāga) とは「敷地のナーガ」を意味する。その名のとおりに、寺院などの宗教的な施設を建築するときに、建築予定の敷地に描かれるナーガのことである。

仏典や仏教美術にしばしば登場するナーガは、インドにおける民間信仰の主役のひとつとしてよく知られている。釈迦の生涯のさまざまな場面で、ある時は護教者、ある時は調伏の対象として、ナーガは登場する。葉叉や羅刹とならんで、仏伝やジャータカをいろどる神話的存在として重要な位置を占めることも周知のことである。中国において龍と結びつき、わが国でも龍神や龍王の名で信仰されてきた。

ヴァーストゥナーガも上半身は人間で下半身は蛇という典型的なナーガの姿をとる。このナーガは、これから寺院などを建てる予定地に、からだを横たえた姿で描かれる。密教ではマンダラを制作するときにも、ヴァーストゥナーガは登場する。この場合のマンダラは、地面の上に色の付いた砂などで作られるマンダラで、灌頂と呼ばれる弟子の入門儀礼などで用いられる、儀礼のためのマンダラである。マンダラの制作に先立って、マンダラを描く地面に、建築儀礼と同様に、ヴァーストゥナーガは描かれる。これは、マンダラを制作する儀礼が、インドの伝統的な建築儀礼と密接な関係を持つためである。マンダラはしばしば「宇宙の縮図」とか「神々の世界の模式図」と呼ばれるが、その構造

は何よりも「家」にもとづいている。マンダラを作ることは家屋建築儀礼に他ならないのである⁽¹⁾。

マンダラの制作儀礼は、日本密教では伝統的に「七日作壇法」と呼ばれる。これは『大日経』などの経典に説かれ、その名称の通り、七日間かけて行われたことに由来する。しかし、日本のマンダラは、掛け図などの形式の図絵のマンダラが主流で、灌頂で用いられるマンダラも、すでに描いてあるマンダラを灌頂の場に広げる、いわゆる「敷マンダラ」を用いるのが一般的であった。そのため、実際に七日かけてマンダラを作ることはほとんどなかった。

これに対し、インドではマンダラは儀礼のたびに所定の手続きを経て制作され、儀礼終了時には破壊された。このようなマンダラは「土壇マンダラ」と呼ばれることもあるが、むしろ、インド密教でマンダラといえ、この形式のものを指すのが普通であった。インドにマンダラの遺例がほとんど残されていないのも、本来マンダラがこのような一過的な儀礼の装置であったからに他ならない。

このようなマンダラに関する情報を含む文献は「マンダラ儀軌」と呼ばれ、インド密教において数多く著された。マンダラの制作方法だけでなく、それを用いた灌頂などの儀礼の解説を主題とする文献群である。数あるマンダラ儀軌書の中でも、最も重要な位置を占めるのが、11世紀から12世紀にかけて活躍したアバヤーカラグプタ (Abhayākara Gupta) の『ヴァジュラーヴァリー』 (*Vajrāvalī*, 以下VA) である。インドにおけるマンダラに関する密教儀礼を大成した文献であると同時に、チベット仏教にも大きな影響を与えた。

ヴァーストゥナーガに関する儀礼を含むマンダラ制作儀礼の大まかな流れを、このVAにしたがって簡単に紹介しておこう。

はじめにマンダラを描くための土地を選定し、いくつかの方法でこの土地が適格であることを検査する。適切な条件を備えていることがわかれば、地面の浄化を行う。ヴァーストゥナーガに関する儀礼は、この土地の浄化の一環とし

て実施される。また、浄化の過程で土地に五種の宝石や穀物などが埋蔵される。これは建築儀礼で重要な位置を占める「受胎の儀式」(garbhādhāna)に相当する⁽²⁾。その後、実際に建築される寺院などは、これによって誕生する大地の「子ども」なのである。

浄化を終えると、「土地の掌握」(bhūmiparigraha)という儀礼が行われる。さまざまな内容を持つ複雑な儀礼であるが、儀礼を進める中心的な存在である阿闍梨に対して、弟子たちが制作予定のマンドラを開示するよう請願する内容と、この地に住む悪鬼や土地神などに対して、土地への侵入を禁ずる諸々の手続きが示される。これらに続いて、一種の結界の作法である「妨害者にキーラを打つ儀礼」(vighnakīlana)が行われ、マンドラを描く土地が完全に浄化される。そして、大地の女神ヴァスダラー(Vasudharā)に対して、マンドラのために土地を借用することを請願する。

以上がマンドラを描くための地面を対象とした儀礼であるため、チベットでは「地儀軌」(sa'i cho ga)とも呼ばれる。土地の準備がこれによって完了するが、実際にマンドラを描く前に、後の灌頂で用いる瓶が準備され、その瓶の水によって、マンドラを描くための道具や素材が浄められる。

マンドラの制作は、全体の輪郭線を引く「墨打ちの儀軌」(sūtraṇavidhi)と、五色の砂を用いてマンドラを描く「彩色の儀軌」(rajaḥpātanavidhi)からなる。ここで説かれる内容やプロセスは、チベット仏教の砂マンドラの制作として、本や映像などを通して、しばしば紹介されているため、比較的良好に知られているが、マンドラ制作のプロセス全体から見れば、その一部にすぎない。また、描き終わってからも、マンドラに描かれている仏たちを、実際にその場に呼び寄せるための手続きをふまえないければ、本当の意味での「仏たちの世界」にはならない。

こうしてできあがったマンドラを前にして、弟子の灌頂儀礼が行われる。あるいは尊像や僧院などの完成儀礼であるプラティシュター(pratiṣṭhā)といわ

れる儀礼も、灌頂と同じような方法で行われる。いずれも複雑なプロセスからなる儀礼であるが、きわめて単純化して示せば、灌頂の受者である弟子や、完成儀礼の対象である尊像などが、マンダラの中央に描かれている仏と同一であることを確認する儀式である。マンダラとはこのような儀礼の対象が、本来住している「聖なる世界」なのである。

このことからマンダラの制作儀礼を見直すならば、マンダラを作る方法は、単に図絵として仏たちを描くのではなく、仏たちの世界を創造する一種の宇宙開闢儀礼であることがわかる。マンダラが家の構造をとることも、このことと密接な関係を持つ。家とは最も一般的な宇宙の表象であり、われわれに身近なコスモスである。M. エリアーデが指摘するように、家屋建築儀礼がしばしば創世神話と結びついているのもこのためである。

マンダラの制作儀礼の持つこのような意義を確認した上で、そこに含まれるヴァーストゥナーガの儀礼について以下に検討を行おう。マンダラの制作儀礼が、インドの建築儀礼に範をとったということは、わが国の密教の研究者によって、かなりはやくから指摘されてきたが、その具体的な対応について検討が加えられることは、ほとんどなかった。マンダラの制作儀礼そのものが、日本密教の実践において実質的な意味を持たず、研究対象とされなかったことや、インドの建築儀礼についての情報不足がその背後にあるであろう。本稿はヴァーストゥナーガという素材を手がかりに行う、建築儀礼とマンダラ制作儀礼の両者に関する一考察である⁽³⁾。

2. ヴァーストゥナーガの儀礼

(1) 『ヴァジュラーヴァリー』(Vajrāvalī: VA)

VAにヴァーストゥナーガが登場するのは「僧院などへのアルガの儀軌」(vihār-ādyarghavidhi) と「土地に穴を掘る儀軌」(bhūkhananavidhi) である。前者

ヴァーストゥナーガに関する考察

は僧院などを建立する前に行われる建築儀礼で、後者はマンダラ制作儀礼の一部である。先述のようにこれらはパラレルな構造の儀礼で、ヴァーストゥナーガについては前者が詳しく述べる。該当箇所は以下の通りである⁽⁴⁾。

妨害者を粉碎したと確信した〔阿闍梨〕は、ヴァーストゥナーガの検査を行う。僧院などが建立される土地を、周囲も含めて四角に測量させ、その土地の中央にヴァーストゥナーガが横たわっている等の特徴を考察し、地面の整備を行わなければならない。これについては、太陽の進行に応じて、バードラ月以降の3か月ごとに、東南西北の順に頭を向け、それに応じて南以下に顔を向けて、その土地の中央にヴァーストゥナーガが横たわっていると言われている。

それを観察し、金剛拳で糸を手にし、〔阿闍梨は〕助手とともに右回りに進んで、南東と北西に〔それぞれ〕立ち、東西北南の方角に線を順に引き、日の出とともにはじめ、穴を右回りに掘れ。ヴァーストゥナーガの胸のところ (krodabhāga) で、胸から1ハスタ⁽⁵⁾離れたところに穴を掘る。目から1ダンダ⁽⁶⁾のところという説もある。

もし誤って〔ヴァーストゥナーガの〕頭の部分を掘れば、父や子などが滅びる。もし背中を掘れば自分自身が滅びるか、その地を追放されることになる。尻尾を掘れば、牛、水牛などが滅びる。土の中に石があれば風が起こる。骨があれば苦痛が起こる。瓦礫があれば口がきけなくなる。穀物や炭があれば熱病になる。毛髪、木の根、木片などがあれば小さな災いが起こる。そのため、木の株、木の根、蟻塚、骨、炭などを取り除き、地、火、諸如来、その土地の神、護方神、地方神を息災の護摩によって満足させよ。(Lokesh Chandra 1977b: 8-9)

僧院などの建設予定地を四角にし、そこにヴァーストゥナーガが横臥するこ

とを観察する。ヴァーストゥナーガの儀礼の最も特徴的な点は、VAのがこの四角い区画を毎日少しずつ移動することである。文中の「バードラ月以降の3か月ごとに…」という規定がこれにあたる。はじめの3か月は東の辺を北東の端から南東の隅に向かって移動し、同様に南以下の三方も、三か月ずつかけて動いていく。尻尾は頭と正反対の位置にあり、顔はつねに向かって右、すなわち進行方向を向いている。後掲の文献では、一か月を30日で計算して、各辺を90の目盛りにわけ、それを毎日一目盛りずつ進むと、さらに詳しく説明することも多い。

儀礼を行っている日のヴァーストゥナーガの位置が確定したら、それを基準にして、所定の位置に穴を掘る。穴はgartāpūraと呼ばれ、「埋められる穴」という意味になる。チベット訳はrtsig rmangと訳され、「基礎の囲い」という意味を辞書は示す⁽⁷⁾。VAはこの穴の位置を「胸から1ハスタはなれたところ」あるいは「目から1ダングのところ」と呼ぶ。後掲の文献の多くが、穴の位置を各辺やナーガからの距離で示し、さらに穴の大きさそのものも、縦横の長さをあげるのに対し、VAの説明はかなり簡単である。また、ハスタやダングという絶対的な長さで示しているが、他の文献では全体の区画の長さを基準にした相対的な計測法を用いることが多い。

穴を掘る場所はきわめて厳格に定められていたようで、誤ってヴァーストゥナーガの身体がある部分に穴を掘ると、さまざまな災厄がもたらされる。そして、掘った土の中に不純物があれば、それをていねいに取り除き、もう一度その土で穴を埋め直す。土中の不純物の内容にしたがって、やはりさまざまな災厄が起こると信じられていたらしい。

以上が建築儀礼の一プロセスとして行われるヴァーストゥナーガの儀礼であるが、VAはマンダラの制作儀礼でもヴァーストゥナーガに言及する。「土地に穴を掘る儀軌」の終わりの部分がそれで、これは「三種の土地の浄化の儀軌」(tridhābhūmiśodhanavidhi) につながっていく。この部分とあわせて以下に示

そう。

つぎにその土地に妨害者がいないことを確認し、バリを与え、前と同じように、ヴァーストゥナーガの胸の部分、喉の長さまで、あるいは1 ヴヤーマ⁽⁸⁾、水まで、岩まで、もしくは、成就が劣っているか、中庸か、優れているかという区分によって、[順に] 膝、尻、臍の深さまで、穴を掘れ。以上が地面に穴を掘る儀軌である。

つぎに、

「もし[土中に] 石があるならば大風が、骨があれば苦痛が起こる。もし小石があれば啞に、穀物、炭があれば熱病になる。もし毛髪、木の根、木片があれば、小さな災いが起こる。」

と知り、灰、炭、毛髪、穀物、石、骨、小石、煉瓦、木片を取り除く。そして香水を撒布したその土で穴を埋めよ。もし足りなければ別の[土]でも[埋めよ]。「フーム」という文字とすべての儀礼のマントラを唱えた香水を撒き、細かくくだき、地面を半ハスタの高さで、平坦で、いささか亀の甲羅のような高さを持ち、東と北が低くなるようにせよ。(Lokesh Chandra 1977b: 18-19)

ここではVAの作者は「前と同じように」と述べ、具体的なヴァーストゥナーガの説明は行わず、前掲の内容を参照するよう指示する。ただし、そこでは言及されなかった穴の深さについて、いくつかの説をあげる。成就のレベルと対応させて、三段階の深さがあるのは、マンダラを描いたあとで行われる灌頂の儀礼で、灌頂の受者となる弟子の成就のレベルと関係付けられていると考えられる。高いレベルの成就に達したもののほど、掘る穴も深くなる。必然的に掘り出される土の量も増えることになり、次に行われる土地の浄化が徹底したものになる。

「土地の浄化の儀軌」では、土中の不純物とそれによってもたらされる災厄が、偈頌の形で示される。内容的には建築儀礼の場合と同様である。そして、これらの不純物を土中から取り除いた上で、もう一度、穴を埋め直し、さらに別の土も加えて、全体をやや高くして整地する。

(2)『阿闍梨所作集成』(*Vajrācāryakriyāsamuccaya*: ACR)

ジャガッド・ダルパナ(Jagaddarpaṇa)という伝説的な行者に帰せられるACRは、きわめて大部の密教儀礼文献である。その中にはVAや、VAと密接な関係を持つ『ニシュパナヨーガーヴァリー』(*Niṣṭānnayogāvalī*)『ジュヨーティルマンジャリー』(*Jyotirmañjarī*)と重なる部分もあり、さらに『造像量度経』や独立の密教儀軌を含む、一種の百科全書的な儀軌となっている。インドで成立したと考えられるが、その成立はかなり遅く、インド密教やチベット仏教でそれほど重視された様子はない。むしろ、ネパール仏教においてこの文献は重要な位置を占めた。「金剛阿闍梨所作集成」(*Vajrācāryakriyāsamuccaya*)という名称で呼ばれることもあるが、これはネパール仏教の職業司祭で、カースト名にもなっているヴァジュラーチャーリヤ(*Vajrācārya*)が、この文献を重用したことに、おそらく関係する⁽⁹⁾。

ACRに説かれるヴァーストゥナーガの儀礼は、VAに比べてはるかに詳細なものになっている。おそらくその大半は、この次にあげるタターガタヴァジュラ(*Tathāgatavajra*)によるマングラ儀軌を参照したことが予想される。あるいは、この両文献で共通の「原資料」(文献ではなく伝承であった可能性もある)にもとづいていたかもしれない。ただし、両者の間では一致しない部分もあり、さらにACRにのみ見られる情報もいくつか認められる。ACRもVAのはじめの例と同じく、建築儀礼の中でヴァーストゥナーガが説かれている。その全文は以下の通り(数字と見出しは訳者による)。

〈1〉儀礼的耕作

つぎに不完全な欠点すべてを排していると知ったその土地の区画の中央に、大麦を撒き、芽が出て、茎となったものを、牛たちに食べさせる。そして、それらの〔牛の〕尿、糞、乳を混ぜて、〔地面の上に〕撒布することで、寂靜の自性を持ち、清浄になった土地の底に、いかなる時もナーガなどを観察せよ。

〈2〉土地の分割

その次に、僧院、仏塔、草庵、香殿、樓閣、祠堂などを作ろうと望むものは、ヴァーストゥナーガを検査しなければならない。どのような土地の区画であっても、四角にして、四方の土地の辺を、それぞれ三か月と〔そこに含まれる〕日数をそこに〔あてる〕。北東から南東の端まで、東の辺を90に分割する。同様に、南東から南西の端まで、南西から北西の端まで、北西からブータの王（＝北東）の端まで、同様に90にする。

〈3〉移動法

バードラ月、アーシュヴィナ月、そしてカールティカ月の間は、北東の隅以下に頭、南西の隅以下に尻尾があり、土地の区画の中央に秘処を置く。臍から下の部分は蛇のからだ、上は龍蓋を付けた人のからだ、ヤマの顔を持ち、左手は左の耳に、右手は宝を持ち腰に当てる。土地の9区画(nava-bhūmibhāga)を覆って横たわる。この方角に蛇が住する。土地の区画の中心を測るがごとく、瘦せたからだが東から西の端などを進む。第一日の太陽の動きにつれ、一昼夜ごとに目盛りひとつずつ進む。適宜知られるように、東から一目盛りずつ動き、南、西、北も同様に。マールガ月、サハスヤ月、マーガ月の白分からはじめ、ヴァルナの方角（＝西）に顔を向けて横たわり、南東の方角から最上の支分（＝頭）が動き、北西の隅から尻尾が動く。ファルグ月、マドゥ月、マーダヴァ月には、ヤクシャの王の方角（＝北）に顔を向け、南西の隅から最上の支分が動き、北東の隅から尻尾が

動く。ジェーシュタ月、シュチュヤ月、シュラーヴァナ月には、東に顔を向け、北西の隅から最上の支分が動き、南東の部分に尻尾が動く。1年で土地のすべてを覆い、一度のみならず正しく回る。

〈4〉八大龍王

ナーガの王のひと月ごとの移動の違いをとくに理解し、シェーシャ(Śeṣa)を自性とする白く美しいお姿を、尻尾から順に観想し、その身体に住する八大龍王を、供物とともに牛乳で供養する。尻尾の部分には真っ青のクリカ、秘処には青白い色のカルコータカ、臍には蓮華の茎のように[白い]シャンカパーラ、腕には金色のマハーパドマ、ドゥルバ草と同じ[色の]ヴァースキは心臓に住し、タクシャカという赤いものは喉にいる。耳には白い光の白いパドマ、頭頂には青いアナンタのナーガである。

〈5〉穴の掘り方

作業をするものがヴィグナータカ(Vighnāntaka)の姿をすると観想し、[彼らが]金剛の印のついた鋤をしっかりと握り、満足させてからマーラの群を追放し、それによって、はじめに左手から、天の王(=インドラ)と財の王(=ヴァイシュラヴァナ)の方角(=東と北)に顔を向け、正しくまわり、4回掘らせる。その土を静かにバリ(bali)の場所に置き、南東などの隅で、外に放らさせる。そして、5回目に掘った土を、努力して、土地の区画の中央で、よき心のものは細かく砕く。この5回[掘った]土を、大勢の作業をする者たちが、四方と四隅で撒く。

〈6〉穴の位置・災厄

端から21目盛り離れ、[その]場所から9目盛り分掘らせる。これは胸の前の部分で、喜ばしき土地である。法、利益、望み、功德が増大し、成就が与えられる。もし、9つの区画に正しく住している蛇の場所を掘ってしまったら、父母と娘、息子、兄弟姉妹、嫁、親族、親友の者たちが死ぬことになる。もし、背中を掘ったなら、自分自身が滅びる。自分の場所から

追放されるか、少なからざる財の損失がある。尻尾を [掘ったなら]、象、馬、水牛、山羊、牛、牝牛が減び、眷属、従者、力、名声が損なわれる。もし5回掘った土の中に、木、蟻の巣、毛髪、爪、灰が現れたら、害が起こる。石からは風のおそれが、穀物、焼けた木片からは、さまざまな伝染病が起こり、骨からは苦痛の病が起こる。吉凶の多くの特徴の形を知り、阿闍梨、工匠、施主たちが、欠点をなくした地面の穴をすべて、清浄な土によって、あまねく、かつ速やかに満たせ。

〈7〉 ナーガの大きさに関する議論

それゆえ、ヴァーストゥナーガが中央の梵線⁽¹⁰⁾いっぱいまで横たわっていると理解している者たちは、仏説の意味を理解しないために論難しているのである。北東の隅からはじめ、バードラ月から三カ月ごとの日の順に従い、[所定の]方角にいきわたってナーガが横たわっていると、賢者たちは[説いている]。以上がヴァーストゥナーガを検査する儀軌である。(Lokesh Chandra 1977a : 15-18)

冒頭の部分に説かれる穀物の育成と、それを食べる牛の糞などで土地を浄めるプロセスは、ヴァーストゥナーガを説く他の文献には見られない。ただし、これはヒンドゥーの建築儀礼においてはきわめて一般的な手続きである⁽¹¹⁾。「儀礼的耕作」(karṣaṇa)と呼ばれ、実際に穀物が実を付けるまで育て、それを食べさせる。撒かれる穀物も、米やインゲン豆、大麦などがあげられる。農耕儀礼が建築儀礼と重なることは、五種の宝石などの埋蔵による「受胎の儀式」において、土地の生産性と、そこで生み出される建築物という図式からも読みとることができた。また、実際に土地が肥沃であることを確認するという現実的な理由も指摘されている。

〈2〉から〈6〉のヴァーストゥナーガに関する説明の部分は、すべてインドラヴァジュラ調(indravajra)の偈頌で書かれている。ヴァーストゥナーガが移

動する方法は、VAと基本的には同じであるが、より詳しい説明が与えられている。各辺を3か月に相当する日数の90で分割し、3か月ごとのそれぞれについて、頭や尻尾の位置、顔の向きなどが示されている。上半身が人間で下半身が蛇で、左手を耳に当て、宝を持った右手を腰に置く等の、ヴァーストゥナーガの姿にも言及する。ヴァーストゥナーガの移動法を説明したあと、そのからだの各部に八匹のナーガ、すなわち八大龍王が観想される。それぞれのナーガの色が重要な情報であったことがわかる⁽¹²⁾。

続いて穴を掘る方法が示される。作業する複数のものがヴィグナーンタカという忿怒形の尊格の姿をとることが観想され、彼らが所定の方法で穴を掘る。はじめに掘った5回分の土については、きまったところに置かれて処理されたらしい。彼らの姿のモデルとなるヴィグナーンタカは「妨害者を打破するもの」の意味で、マンダラでは北方を守ることが多い忿怒尊である。軍荼梨明王に相当する甘露軍荼梨 (Amṛtakuṇḍalin) と同体視されている。

彼らが掘る穴の位置については、このあとで説明されるが、「21目盛り離れた場所から9目盛り分」というだけの簡単なものである。これは土地の区画の一辺を90に分割したときの目盛りに相当し、ヴァーストゥナーガの頭の端から21目盛り離れたところから9目盛り分を示していると考えられる。しかし、これだけでは穴の具体的な位置や大きさはわからない。なお、この部分に対応するターガタヴァジュラの記述はこれよりも詳しく、両文献の間で情報が一致しない例のひとつである。

穴を掘る位置を間違えて、ヴァーストゥナーガの身体を損ねてしまったときの災厄や、土中に含まれる不純物の種類と、それに起因する災いについては、VAとほぼ同一内容であるが、ここでも説明はより詳細である。

最後に、ヴァーストゥナーガの大きさについての異説を紹介し、これが不適当なものであることを指摘する。これはACR以外には見られない情報である。

(3) タターガタヴァジュラのマンダラ儀軌

先述のように、タターガタヴァジュラによるサンヴァラ・マンダラの儀軌には、ACRに説かれるヴァーストゥナーガの記述にかなり一致する内容が含まれる。チベットのツォンカパは、代表作のひとつ『真言道次第』(*sNgags rim chen po*)の中で、VAに説かれるヴァーストゥナーガの儀軌の内容を紹介した上で、さらに詳しい情報として、このタターガタヴァジュラの儀軌に見られるヴァーストゥナーガの記述を、ほぼ全文にわたって引用している⁽¹³⁾。インドのマンダラ儀軌や注釈書の中で、ヴァーストゥナーガの儀礼が登場するのは、このタターガタヴァジュラのものも含め、サンヴァラ系のものに集中している。その理由は明らかではないが、サンヴァラの特定の流派とこの儀礼の伝統が、何らかの関係を有していたのかもしれない。VAの著者アバヤーカラグプタもサンヴァラ関係の文献をいくつか著している⁽¹⁴⁾。

タターガタヴァジュラの説くヴァーストゥナーガに関する儀礼は以下の通りである。

〈1〉土地の分割

地面を四角にして、そこを3か月の日数によって、その土地のそれぞれの方角を分割し、北東から南東の間、東の土地を90に分割し、南東から南西の間も、南西から北西の間も、北西から北東の間も、同じように90に分割せよ。

〈2〉移動法

秋の始め、中、終わりの月の間、北東の隅から頭を置き、南西の隅から尻尾の部分、秘処は地面の中央に置く。臍から下の部分は蛇の身体、上の部分は蛇蓋を伴う人間のお姿、南を向き、左手は耳に当て、右手は宝を持って脇に当てる。地面の9つの部分を占めるように横たわり、ナーガの王の身体の長さは10ヴィタスティ⁽¹⁵⁾である。東と西の端に〔接して〕横た

わり、地面のこの各部を測るようである。太陽の動きに合わせて、一日をはじめとして毎日一目盛りずつ、適宜、東の部分動き、南、西、北にも同様に[動く]。冬の始め、中、終わりの月の間の白分から始め、西に顔を向け、南東の隅に優れた支分(=頭)を示し、北西の隅から尻尾が置かれる。春の始め、中、終わりの月の間、南西の隅に顔を向け、北東の隅に尻尾を[置く]。夏の始め、中、終わりの月の間、東の方角に顔を向け、北西の隅から頭を置き、南東の隅などに尻尾が[置かれる]。一年で土地の隅から隅まで一回りするこゝで、一巡する。

く3> 八大龍王

ナーガの王 (lto 'phy'e'i rgyal po) の動き方の区別は、それぞれの月の違いを知り、自性はアナンタ (mTha' yas) で、白く莊嚴されたお体を、尻尾から順序どおりに観想する。その [ヴァーストゥナーガの] 身体に八大龍王[がいる]。牛乳などの供物によって供養する。尻尾の先には真つ青のクリカ、秘処にはドゥルバ草のような緑のカルコータカ、臍にはレンコンのように [白い] シャンカパーラ、腕には金と等しきマハーパドマ、心臓にいるヴァースキは緑で、タクシャカなるものは赤く、のどにいる。耳には白い光をそなえたパドマ、頭頂には青いアナンタがいる。

く4> 穴の掘り方

人をヴィグナーンタカの姿に観想し、勇者の手には金剛の鋏を持たせ、左手は下に向けて握り、それによってマーラの群を威嚇して追放せよ。東と北の方角に顔を向けて、[鋏の]歯で4回分掘った土を、心を落ち着かせてバリの中に入れるか、南東などの外に撒布する。掘り返してその第五番目に掘った土を、地面の中央に正しき心で広げる。その五回掘った土のところで、大勢の作業者が四方と四隅のあらゆる方角から掘れ。

く5> 穴の位置・災厄

東から27単位離れ、北から13.5単位離れる。東西は9単位、南北は4.5単

位。これを脇の前にはじめに掘る。それによって、法、財、望んだ利益が増大し、成就する。もし、蛇の王の場所の9区画の場所で掘ったならば、父母、息子、娘、兄弟、嫁、自分の親戚、友人が死ぬ。もし、背中を掘ったならば自らが死に、あるいは自分の場所から追放され、財が損なわれる。尻尾であるなら、象、馬、水牛、牡牛が死に、力もまた損なわれる。もし、5回掘った部分の中に木、毛髪、蟻塚、爪、灰があれば、害が生じ、石によって風のおそれが、藁、木片によって伝染病が、骨によって苦痛が起こる。

〈6〉 穴を埋める

それから石などをきれいに除き、その土によって、もしくはそれが十分ではなければ他の土にも、香水を撒布し、穴を埋めよ。(TTP, No.2226, Vol.52, 74.5.4-75.2.6)

はじめのヴァーストゥナーガの位置を知るための土地の分割方法は、内容的にはACRと同じであるが、文章は同一ではない。タターガタヴァジュラはナーガの王、すなわちヴァーストゥナーガの身体の大きさが10ヴィタスティであると述べているが、これもACRには含まれない情報である。

ACRではヴァーストゥナーガの自性はシェーシャであったが、この文献ではアナントとする。次のヴァーストゥナーガの身体各部に八匹のナーガがいることと、穴を掘る者たちの説明や穴を掘る方法についての記述は、ACRとまったく同じである。

ACRでは不十分であった穴の位置と大きさについては、東から27目盛り、北から13.5目盛り離れたところに、たて9目盛り、横4.5目盛りの穴を掘るよう指示する。ACRにも示されていた東からの距離が、ここでは21ではなく27となっている。ここで用いられている目盛りも、土地の区画の一边を90に分割したときの一目盛り、すなわちヴァーストゥナーガが一日に進む長さに相当すると考

えられる。

ところで、ここではじめて具体的な穴の大きさと位置が示されたが、その記述は理解しにくい。「東から」というのは、ヴァーストゥナーガが東の辺に頭を置いているバードラ月以降の3か月間の場合であろう。バードラ月の翌月のアーシュヴィナ月の16日目、すなわちナーガが頭を東の辺の中央に置いた日を考えればわかりやすい。はじめの数字は東の辺から27目盛り分、内側に入ったところを示す。しかし、次の「北から」は、これと垂直方向にある長さを示しているが、北の辺から数えているとは考えにくい。これに続いて、穴を掘る場所が「胸の〔前の〕ところ」（チベット訳では「脇の下の前」）という説明があるからである。北の辺から13.5目盛りのところは、右に顔を向けて横たわっているナーガのおそらく背中横（あるいは後ろ）であり、胸のところにはならないであろう。

ACRでもこの文献でもヴァーストゥナーガは左手を耳に当て、右手を腰に当てる姿勢をとっていたが、これも穴の位置におそらく関係する。胸の前に穴を掘るときに腕を上挙げておけば、穴の位置が腕に重ならないため、ナーガの身体を傷つけずにすむ。つまり、穴はヴァーストゥナーガの左側の胸の前に掘るのであって、北の辺に近い右側ではなかったと考えられる。

次に紹介する文献『所作集』（*Kriyāsaṃgraha*）では、穴の位置と大きさについて、タターガタヴァジュラと同じ数値があげられているが、「頭から27目盛り、背中から13.5目盛り」という表現をとる。ヴァーストゥナーガの背中から数えて13.5目盛りであれば、穴の位置はナーガの左側の胸の前におそくなる。もっとも、その場合ヴァーストゥナーガのからだの幅は13.5目盛り以下でなければならない。あるいは、ナーガが顔だけ右を向けて仰向けに横たわっているとすれば、背中は背骨の位置、すなわちからだの中心線を指していたかもしれない。その場合は、からだの半分の幅が13.5目盛りより小さければよいことになる。

誤ってヴァーストゥナーガのからだの部位を掘ってしまった場合の災厄や、土中の不純物がもたらす災いについての記述はACRに一致する。最後に、浄化をすませた土や、香水によって別に浄化した土で穴を埋めるという記述は、ACRでは偈頌で示されていたが、ここでは散文である。

(4)『所作集』(*Kriyāsaṃgraha*あるいは*Kriyāsaṃgraha-ṣaṅkṣitā*: KRY)

クラダッタ (Kuladatta) の著したKRYも、ACRと同じく密教儀礼の集成書の内容を持つ。詳細な研究はまだ十分に行われていない文献であるが、金剛界マンドラに関するマンドラ儀軌の内容を持ち、灌頂やプラティシュターを扱う章も含まれる。

KRYに含まれるヴァーストゥナーガの儀礼は、それ以外の文献とはかなり異なる内容を持つ。僧院などを建立する地面にヴァーストゥナーガを描き、その移動方法や穴を掘る位置などは、他の文献とかなり共通するが、説明の方法はまったく独自である。また、ヴァーストゥナーガの儀礼が何の目的で行われるのかがまったく示されず、この前後に置かれた章とのつながりも不明である。おそらく、ヴァーストゥナーガの儀礼そのものについて、ある程度の知識をすでに有しているものを読者に想定し、ヴァーストゥナーガに関する実際的な情報のみ提示することを、KRYの作者は意図したのであろう。

KRYに含まれるヴァーストゥナーガについての記述は、ACRやタターガタヴァジュラによる儀軌とならんでかなり長文であるが、以下にそれを示す。

〈1〉ナーガの移動法

次に、ヴァーストゥナーガをよく観察せよ。このうち、[太陽が]射手座に入った時から90日間、魚座に入るまでの間は、南に頭を向けて、西に顔を向けて、ナーガは横たわっている。次に、魚座に入った時から双子座に入るまでの間は、西に頭を向けて、北に顔を向けてナーガは横たわってい

る。同様に、双子座に入ったときから、乙女座に入るまでの間は、北に頭を向けて、東に顔を向けてナーガは横たわっている。同様に、乙女座に入ったときから射手座に入るまでの間は、そこで、東に頭を向けて、南に顔を向けてナーガは横たわっている。したがって、次のように説かれる。日の進行にしたがって目盛りをひとつずつ進み、ナーガの進み方になるという。

〈2〉 穴の位置と大きさ

ヴァーストゥナーガの胸の部分区切る。これは、頭から27目盛りである。背中の端から13.5目盛り離れるのが、ヴァーストゥナーガの胸の部分である。これはまた、長さが9目盛り、幅が4.5目盛りである。あるいは、東の端からと西の端からの10分の1が胸の部分の長さである。その半分が幅である。胸の部分よりも上では、頭の端までが、胸の長さの3倍となる(=27目盛り)。胸の部分の長さとの幅の合計(=13.5目盛り)と等しいのが、背中の端までである。南と北、西と東、北と南の場合も同様である。

〈3〉 災厄

ヴァーストゥナーガの頭を掘ると、父と息子などが死ぬ。背中の方を掘ると、施主が死ぬ。あるいは国から追放される。尻尾を掘ると牛や水牛などが滅びることになると言われる。

〈4〉 一日に移動する距離⁽¹⁶⁾

僧院の地面の表面にヴァーストゥナーガを観察し、埋められる穴としてヴァーストゥナーガの胸の部分をはじめに掘るのである。16ハスタの部屋を例にとるならば、僧院の地面の部分、13アングラに4分の1満たない量が、ヴァーストゥナーガが一日に動く長さである。同様に、14ハスタの部屋を例にすると、僧院の地面の部分、1.5ヤヴァより少し多い11アングラが、ヴァーストゥナーガが1日に動く長さである。同様に、12ハスタの部屋の場合、僧院の地面の部分、3あるいは4少ないヤヴァと9アング

ラが、ヴァーストゥナーガの1日の動く長さである。同様に、10ハスタの部屋の場合、8アングラが僧院の地面の部分をヴァーストゥナーガが1日に動く長さである。

〈5〉穴の位置と大きさの具体例

さらに、胸の部分の特徴が説かれている。16ハスタの部屋の土地には、ヴァーストゥナーガの頭の下に、そこから14ハスタ11アングラである。背中の端には、7ハスタ4.5アングラ離れて、長さは4ハスタ19アングラあまり、幅は2ハスタ9.5アングラの大きさが、ヴァーストゥナーガの胸の部分である。同様に、14ハスタの部屋の場合、僧院の土地に、ヴァーストゥナーガの頭頂から、下に13ハスタ5アングラで、背中の端には、6ハスタ16アングラ離れて、長さは4ハスタ10アングラ、幅は2ハスタ5アングラが、ヴァーストゥナーガの胸の部分である。同様に、12ハスタの部屋の場合の僧院の土地の部分には、ヴァーストゥナーガの頭から下に10ハスタ5アングラ、背中の端には5ハスタ5アングラ離れて、長さは3ハスタ10アングラで、幅は1ハスタ17アングラが、ヴァーストゥナーガの胸の部分である。同様に、10ハスタの部屋の場合の僧院の土地の部分には、ヴァーストゥナーガの頭から下に9ハスタ、背中の端には4ハスタ13アングラ離れて、長さは3ハスタで、幅は1ハスタ12アングラが、ヴァーストゥナーガの胸の部分である。

〈6〉八大龍王

このナーガもほら貝やジャスミンや月の色のように、左手は自分の頭の下に置き、右手では宝を持ちながら、自分の足に置く。臍から下は蛇の姿をして、その上は人の姿をし、龍蓋を七つそなえ、僧院などの土地を覆って横たわっている。八大龍王がヴァーストゥナーガの体にいる。牛乳の供物によって供養せよ。このうち、尻尾の先には青いクリカ、秘処にはダブルバ草のような緑のカルコータカ、臍には蓮の茎のように〔白い〕シャン

カパーラ、腕にはマハーパドマで宝石の色、心臓にはヴァースキで、ドゥルバ草のような緑、喉にはタクシャカで赤く、耳には白いパドマ、頭頂には青いアナンタがいる。同様に、大日であるナーガの本質をヴァーストゥナーガが持つと観想せよ。

〈7〉 ナーガへの供養のマントラ

「オーム、アーハ、ヴァルナよ、フーン、スヴァーハー」「オーム、アーハ、クリカよ、フーン、スヴァーハー」「オーム、アーハ、カルコータカよ、フーン、スヴァーハー」「オーム、アーハ、シャンカパーラよ、フーン、スヴァーハー」「オーム、アーハ、マハーパドマよ、フーン、スヴァーハー」「オーム、アーハ、ヴァースキよ、フーン、スヴァーハー」「オーム、アーハ、タクシャカよ、フーン、スヴァーハー」「オーム、アーハ、パドマよ、フーン、スヴァーハー」「オーム、アーハ、アナンタよ、フーン、スヴァーハー」というのが、供養の時のマントラである。(Sharada Rani 1977: 59-63)

ヴァーストゥナーガの位置を説明する冒頭の部分では、これまでの文献がいずれも月の名によってそれを示していたのに対し、KRYでは黄道十二宮の名称を用いている。しかも、はじめに挙げられている射手座は、秋のはじめではなく、秋の終わり頃にあたり、月の名を用いればバードラ月ではなくカールティカ月におそらく相当する。そのため、それ以降の各辺の基準として示される魚座、双子座、乙女座も、冬、春、夏のそれぞれ3番目の月に相当し、すでにあげた文献とは2か月のずれが生じている。さらに、はじめの3か月間は、頭は東ではなく南に向け、以下、西、北、東とする。各月のヴァーストゥナーガの位置をこれまでの文献と比べると、バードラ月は東の辺を3つに分けた中央に相当するため、この月を東の最初においたこれまでの文献とは、ひと月分ずれることになる。別の見方をすれば、ナーガの移動する開始時期が2か月遅

ヴァーストゥナーガに関する考察

れているのに対し、移動の起点が北東から南東に90°かわっているため、そのずれはひと月分ですむことになる。

穴を掘る場所は、これまでと同様「胸の部分」とするが、さらに具体的な位置として、頭から27目盛り、背中から13.5目盛りそれぞれ離れ、そこから縦横が9×4.5目盛りの穴を掘る。タターガタヴァジュラのマンダラ儀軌に見られた規定にほぼ一致するが、すでに述べたように、位置を示す基準が頭と背中になっている。また、穴の長辺が土地の区画の一辺の10分の1であることや、27という数値がその3倍、さらに13.5が穴の長辺と短辺の合計の値であることも、明記されている。

ヴァーストゥナーガの身体の部位を誤って掘った場合の災厄は、ごく簡単なものになっているが、いずれもVAやACRなどにも含まれていた内容である。

これに続いて具体的な数値を列挙する部分は、ヴァーストゥナーガの儀礼を説く他の文献にはまったく見られないものである。まずはじめに、ナーガが一日に動く距離、すなわち建築予定地の一辺の90分の1の長さが示される。KRYはここで、16, 14, 12, 10ハスタの大きさの「部屋」を例にして、それを示している(表1)。それぞれに相当する一目盛りの長さはその30分の1、もしくはそれに近い数値となっていることから、ここで基準として用いられる「部屋」

表1 『所作集』に説かれるナーガの1日の移動距離

1 辺(hasta)	アングラに換算	1 目盛(angula) =一辺÷30	1 目盛りをアングラ とヤヴァに換算	実際の文献の規定
16	384	12.8	12a4.8y	13アングラに4分の1満たない (=12a6y)
14	336	11.2	11a1.6y	1.5ヤヴァより少し長い11アングラ (=11a1.5+αy)
12	288	9.6	9a4.8y	4あるいは3少ないヤヴァと9アングラ (=9a4yあるいは9a5y)
10	240	8	8a	8a

単位 1aṅgula (a) = 8yava (y)

とは、土地全体ではなく、それを縦横三等分してできた9分の1の区画であることがわかる。つまり、16ハスタなどは、ナーガが一月で動く距離に相当し、土地全体の一边の長さではない。1ハスタは建築の棟梁の身体の大きさに左右されるため、厳密な大きさを示すことはできないが、約50cmとすると、一番大きい16ハスタは約8mで、それを3倍した24mが、また一番小さい10ハスタの場合は約15mが、それぞれ建築予定地の一边の長さとなる。前者は576m²(約183坪)、後者は225m²(約68坪)程度の土地を想定して、計測していることになる。

なお、KRYは一目盛りの数値をアングラ (aṅgula) とヤヴァ (yava) という単位を用いて示している。1ハスタは24アングラに相当し、1アングラは8ヤヴァになる。1アングラを6ヤヴァとする換算方法もあるが、実際の数値から見て、ここでは8ヤヴァの換算方法をとっていたと考えられる。KRYでは30分の1に正しく分割できる10ハスタの場合を除き、はじめの3例では近似値を示している。

つづいてKRYの作者は、同じ4種類の大きさの「部屋」を例にして、穴の位置と大きさの具体的な数値を示している(表2)。すなわち、16ハスタ以下の4つのケース(A)のそれぞれに、頭からの距離(B)、背中からの距離(C)、穴の長辺(D)、短辺(E)の長さが、ハスタとアングラの単位を用いて列挙されている。すでに見たKRYの規定では、これらの比率はA:B:C:D:E=30:27:13.5:9:4.5となり、さらにB:C=2:1、D:E=2:1で、C

表2 『所作集』に説かれる穴の位置と大きさ

1 辺(A)	頭から(B)	B/A×100	背中から(C)	長さ(D)	D/A×100	幅(E)
16h(=384a)	14h11a(=347a)	90.3	7h4.5a(=172.5a)	4h19a+α(=115a+α)	29.9	2h9.5a(=57.5a)
14h(=336a)	13h5a(=317a)	94.3	6h16a(=160a)	4h10a(=106a)	31.5	2h5a(=53a)
12h(=288a)	10h5a(=245a)	85	5h5a(=125a)	3h10a(=82a)	28.4	1h17a(=41a)
10h(=240a)	9h(=216a)	90	4h13a(=109a)	3h(=72a)	30	1h12a(=36a)

単位 1hasta(h)=24aṅgula(a)

の長さはDとEの和($C = D + E$)となっている。しかし、ここでも240アングラに相当する10ハスタの場合は、正確にこれに合致した数値となっているが、それ以外の3つのケースではそうではない。割り切れないことがその理由と考えられるが、必ずしも近似値でもない。たとえば、Bの数はAの90%となるはずであるが、実際は85%から94.3%までの幅がある。また、DはAの30パーセントが正しいが、ここでも28.4~31.5%の開きがある。さらに、Eの値はAではなく、その2倍と規定されているDの数値を基準に算出されていることがわかる。同様にCもBの半分の大きさであるべきであるが、これは正確に半分とはなっていない。

実際の寺院などの建築予定地が、この4通りしかなかったとは考えられないため、これらの数値はあくまでも目安として用いられたのであろう。しかし、単に相対的な比率のみを示すのではなく、具体的な数値を複数あげているところに、プラクティカルな性格を持ったKRYの独自性が認められる。

KRYのヴァーストゥナーガの儀礼は、ヴァーストゥナーガの身体各部にすむ8匹のナーガの説明と、彼らに対する供養のマントラの紹介で終わっている。このうち、8匹のナーガの記述はACRなどと内容的には一致している。マントラの方は他の文献には見られない情報であるが、八大龍王に対する一般的なマントラとして、たとえばVAに含まれるナーガへのバリの儀軌にも登場する⁽¹⁷⁾。八大龍王に先立ってヴァルナへのマントラが唱えられるのは、水天であるヴァルナが、これらの八大龍王たちの首領に位置づけられているからであろう⁽¹⁸⁾。

(5)ディヴァーカラチャンドラのマンダラ儀軌(*Śrīherukabhūta-nāma-maṇḍalopāyikā*)

ディヴァーカラチャンドラ(Divākaracandra)によるヘールカマンダラの儀軌には、以下のようなヴァーストゥナーガの儀礼に関する記述が含まれる。ただし内容が十分理解できないところはいくつかある。

〈1〉移動法

膝の深さだけ地面に、羯磨金剛（儀礼行為者）に穴を掘らせる。財のナーガ (ba su'i klu) を観想する。そして完全に浄める。秋の第二、第三の月には⁽¹⁹⁾日が昇るとき東北の方角に「ナーガの頭を」置く。ナーガは南をむいて横たわり、[身体の]左側で住する。冬の第一、第二、第三の月はヤマの方角 (=南) に頭を置き、西に顔を向ける。上半身は人の姿で、[残り]は] ナーガの姿である。春の第一、第二、第三の月は北に顔を向け、西に頭を向けて横たわる。財のナーガは大力を有する。夏の第一、第二、第三の月は、ナーガは半身で横たわり、北に頭を向け、いかなる時も東に顔を向けている。

〈2〉災厄

このナーガの背中下方を、もし掘るならば、施主の望んだ成就が生ずること疑いない。もし、頭を掘ってしまったなら、父、母、兄弟、親類、子ども、孫、力あるものなどが必ずや滅びることになる。もし背中の身体を掘ったならば、場所が損なわれて死ぬ。長時間にわたって、前の部分[を掘ること]によって、牛、水牛などが滅びる。

ナーガの場所を正確に知り、この下方の部分掘らせよ。周回して、土地の評価を知る者は「土地を」見よ。智慧ある賢者は吟味し、そして欠陥を浄化するのであるが、もし、欠陥を浄化しなければ、災いが生ずることになる。

支分がそろった骨と等しきものが入っていたなら欠陥があり、炭の欠陥はおそれを示す。灰があれば、財が減し、死ぬ。人の骨や蛇などの欠陥によっても害が生じる。岩、ゴミ、砂利、爪、髪の毛、尖った木片、煉瓦、塵芥、油、棘などがあつたり、紐、尖ったもの(?) など多くの欠陥が出てくる。欠陥を正しく浄化することで、煩悩もすべて清まる。

〈3〉マントラ

膝の深さまで掘っても、土が清まらない場合、ふたたび真言行者は腰の深さまで浄めながら掘れ。途切れることのないこの過誤が、もし生じることになった場合、手のひらで〔穴を〕覆い、マントラを唱えることで、まさにそれによって清まることになる。マントラは「オーム、殺せ、殺せ、忿怒尊よ、フーム、パット」である。(TTP, No.2390, Vol.56, 223.4.2-5.6)

はじめの段落に示されるヴァーストゥナーガの位置は、秋のはじめの月、すなわちバードラ月に北東の隅を頭にするという一般的なものである。3か月で四辺のうちの一边を移動し、進行方向に顔を向けている点も、これまでと同様である。

正しい場所を掘ることの重要性と、間違えてヴァーストゥナーガの身体を損ねた場合の災厄についても、特別な情報はない。実際に穴を掘る場所についての規定はなく、「ヴァーストゥナーガの下方」という漠然とした表現をとる。掘った穴から出た土中の不純物についても、若干の内容の違いはあるものの、これまでのものと大差はない。

最後の段落は、掘る穴の深さについてで、膝の深さまで掘っても土が清まらない場合は、さらに腰の深さまで掘り、それ以上については、マントラを唱えることで土を浄めよと述べる。掘る穴の深さについては、VAなどにも記述があったが、そこでは弟子の成就のレベルにしたがっていた。

(6)ラトナラクシタの注釈書 (*Śrīsaṃvarodayamahātantrarājasya Padminī-nāma-pañjikā*)

ラトナラクシタ (Ratnarakṣita) のこの文献はマンダラ儀軌ではなく、『サンヴァローダヤ・タントラ』に対する注釈書である。ヴァーストゥナーガについての記述はごく短く、全文は以下の通り。

これについては、地の主を観察するのは以下の通り。マンダラの地面を[実際に作る] マンダラの2倍の大きさの四角い「白檀マンダラ」にして、すべての[辺を] 90に分割して、そこにヴァーストゥナーガを[観察する]。室宿、觜宿、翼宿、心宿以下の3か月ごとに、順に東、南[西、北]に頭を、南以下に顔を向けながら横たわる身体が9区画を占める。室宿から90日間は90の部分のひとつずつ押さえ、過ぎた日数で分割することでも[ナーガの]進み方を考察するならば、頭の方角には20単位か21単位、腹部にも2あるいは3単位はなれ、背中と尻尾も確定し、腹部を掘らせる。成就の劣、中、優の別によって、膝、臀部、臍のところまで[掘る]。以上が地面を掘ることである。(TTP, No.2137, Vol.51, 95.5.4-8)

これから描くマンダラの2倍の大きさの「白檀マンダラ」を地面に作り、そこにヴァーストゥナーガを観察する。「白檀マンダラ」は実際のマンダラを描く前に作られる仮のマンダラで、単にパンチャガヴァ(pañcagavya、牛糞や牛乳などの牛の五種の生産物)や香料などで浄めた場である。マンダラに表された仏の世界を導いてくるための一種の「よりしろ」の役割を果たす。サンスクリットは通常のマンダラと同じmaṇḍalaの語で表すが、チベット訳ではdkyil 'khorではなく、そのままmaṇḍal(a)と音写するのが通例である。2倍の大きさを持つというのは、マンダラの直径の2倍が白檀マンダラの直径に相当するのであろう。

ヴァーストゥナーガの位置を示すために室宿以下の4つの星宿名を用いているが、これは二十八宿に含まれる星宿で、十二か月や黄道十二宮のように一年に配当される。室宿は秋の始め、すなわちバードラ月の頃に相当するため、実際はこれまでと同様、バードラ月以下のはじめの三か月間は東の辺を頭が移動し、順次、右回りに進んでいく。穴を掘る位置は頭の方で20もしくは21単位離れ、腹部は2あるいは3単位離れるとある。はじめの数値が21であればACRの

説に一致するが、それを除いて他の文献には類例がない。また穴を掘る場所はヴァーストゥナーガの腹部である。おそらく腹部の横の場所になるのであろうが、他の文献での「胸の部分」とも異なる。穴の深さはVAと同じく、弟子の成就の度合いにしたがって3段階となっている。

(7) プラジュニャーラクシタとドゥルジャヤチャンドラのマンダラ儀軌
(*Śrīcakraśaṃvaramaṇḍalavidhi Samgraha-nāma, Suparigraha-nāma-maṇḍalopyāyikā*)

この二つのマンダラ儀軌は、ほぼ同一の内容のヴァーストゥナーガを説く。以下の訳文はプラジュニャーラクシタ (Prajñārakṣita) のテキストにしたがったもので、括弧内にドゥルジャヤチャンドラ (Durjayacandra) の儀軌に見られる異読を示す。

秋の第3月（冬の第1月）などからはじめて、3か月ごとに、蛇は南、西、北、東にその頭を向け、左の半身で横たわり、その腹部を知って穴を掘れ。頭や背中の方から（頭や背中などから）掘った場合の過失は甚大であるので、理解せよ。(TTP, No.2186, Vol.51, 263.1.6-7; TTP, No. 2369, Vol.56, 142.4.2-3)

チベット訳テキストが残るのみであるため、原文の比較はできないが、両者の相違点は、開始時期が「秋の第3月」と「冬の第1月」とある点と、第2偈の第3パーダが「頭や背中の方」と「頭や背中など」となっている二つである。このうち、開始時期の相違は、1か月のずれがあるように見えるが、原文のサンスクリットの月名は同じであった可能性もある。チベット語への翻訳者が、同じ月を異なる季節に当てはめたことが推測されるからである。もう一方の異読は、他のテキストとの比較から、「頭や背中など」がおそらく正しい読みであ

ろう。これら二箇所以外の場所を掘った場合の災厄も、おおむね他の文献では言及されていたからである。チベット語のsogs（など）とphyogs（方角）の混同に起因する異読であろう。

VAの移動を開始する時期が、秋の第3月（あるいは冬の第1月）というのは、カールティカ月におそらく相当するが、これはこれまで取り上げてきた文献では、例外的にKRYにのみ見られた。それ以外はいずれもバードラ月であった。プラジュニャーラクシタらの儀軌ではヴァーストゥナーガが移動する方角についても、東ではなく南をはじめにあげ、東を終わりにする。これもKRYのみと一致する。つまり、ヴァーストゥナーガの移動方法は、バードラ月のはじめに北東の隅から動き始める説と、カールティカ月に南東から動き始める説の二つがあることになる。

このヴァーストゥナーガの位置を基準にして穴を掘る場所は、ナーガの腹部とするのみで、具体的な数値は示されていない。また、誤ってナーガの身体を損ねることが、甚大な過失であることは述べられるが、その結果生じた災厄や、土地の浄化についての説明も含まれない。

3. ヴァーストゥナーガ儀礼の多様性

ヴァーストゥナーガの儀礼を説く仏教文献の内容を、主要な項目にしたがってまとめると表3のようになる。このうち、建築儀礼の一部としてヴァーストゥナーガの儀礼を行うものが、VA、ACR、KRYの3点で、それ以外はマンダラ制作のための準備段階に置かれている。VAは後者にも含まれる。VAの中でアバヤーカラグプタが「先述のようにヴァーストゥナーガを観察し」と述べているように、全体の儀礼は寺院建築とマンダラ制作という異なる目的で行われているように、ヴァーストゥナーガの儀礼そのものは、両方で共通で、とくに区別や変化を付けていない。

ヴァーストゥナーガに関する考察

表3 密教文献に見られるヴァーストゥナーガ儀礼の特徴

	VA	ACR	Tathāgatavajra	KRY	Divākara-candra	Ratnarakṣita	Prajñārakṣita
儀礼の種類	建築儀礼・マンダラ儀礼	建築儀礼	マンダラ儀礼	建築儀礼	マンダラ儀礼	マンダラ儀礼	マンダラ儀礼
儀礼的耕作	×	○	×	×	×	×	×
開始時期	バードラ月	バードラ月	バードラ月	射手座（カールティカ月に相当）	バードラ月	室宿（バードラ月に相当）	カールティカ月
開始場所	北東	北東	北東	南東	北東	北東	南東
八大龍王	×	○	○	○	×	×	×
ナーガの名称	×	シェーシャ	アナント	×	×	×	×
ナーガの大きさ	×	9区画 (nava bhāga-kṣṭha)	9区画 (sa'icha dgu)	×	×	9単位 (re'u mig dgu)	×
穴の掘り方	×	○	○	×	×	×	×
穴の位置	胸から1ハスタ、あるいは日から1ダンド	21はなれて9	東から27、北から13.5、長辺9、短辺4.5	頭から27、背中から13.5、長辺9、短辺4.5	背中の方	頭から20あるいは21、腹から2あるいは3離れた腹部	腹部
欠損による災厄	○	○	○	○	○	×	○
土中の不純物	○	○	○	×	○	×	×
備考	マンダラ儀礼は建築儀礼を参照するよう指示し、説明は省略。ただし、穴の深さについての説明を加える。	ナーガの大きさがマンダラの梵線までという説を否定	ACRとほぼパラレルであるが、穴の位置や大きさなどに違いがある。	実際の土地の区画の大きさを4通りあげ、それぞれの一日盛りの大きさ、穴の位置、穴の大きさを示す。最後にナーガへのマントラを列挙。	浄化のマントラをあげる。穴の深さは2段階。	穴の深さは弟子の成就の度合いにしたがって3段階（VAに一致）。	Durjayacandraの儀軌も同一内容。

VAの記述はACRやKRYにくらべて簡略で、すでにヴァーストゥナーガの儀礼をある程度知っているものを、読者に想定しているように感じられる。掘る穴についての情報も具体性を欠き、これだけで正しい穴の位置や大きさを知ることにはできない。文章化していない口伝の要素もあったのかもしれない。

ACRとタターガタヴァジュラの儀軌はすでに見たように、きわめて近い内容を持つ。共通する部分の前後にACRは独自の要素を加えている点と、穴を掘る

位置が一致しない点が、主な相違点としてあげられる。ブラジュニャーラクシタとドゥルジャヤチャンドラの二つの文献も、わずか2偈からなるきわめて短い記述であるが、ほぼ同一の内容を持つ。

全体の中で独自の位置を占めているのが、KRYである。ヴァーストゥナーガの動き方や形態、八大龍王などの情報は、他の文献とも共通するが、穴の位置や大きさについて、建築予定地全体の大きさを基準にした具体的な数値で示されていることは、他に類を見ない。ただし、KRYにはヴァーストゥナーガの儀礼の目的が示されておらず、中途半端な内容で終わっている。口伝などの形で伝えられる別の情報とあわせて利用されたと考えられる。

それぞれの項目について注目すべき点も簡単にまとめておこう。

ヴァーストゥナーガが一年をかけて建築予定地を一周することは、いずれの文献でも共通してみられたが、その基準となる開始の時期と位置については二つの説がある。ひとつはバードラ月のはじめに北東の隅に頭を置くというもので、もうひとつは、カールティカ月に南東の隅からはじめる。黄道十二宮や二十八宿で開始時期を示す文献もあったが、おそらくこの二説のいずれかに相当する。バードラ月とカールティカ月との間には二か月の差があり、一方、開始する位置は90°すなわち3か月分ずれるため、二説の間でヴァーストゥナーガの位置は30°ずつずれることになる。

穴を掘る位置と大きさについてもいくつかの説がある。このうち、KRYとタターガタヴァジュラの儀軌が、東（あるいは頭）から27目盛り、北（あるいは背中）から13.5目盛り離れたところに、たて9目盛り、横4.5目盛りの長方形の穴を掘るとするのが、最も詳しい。ラトナラクシタの儀軌が、頭から20あるいは21目盛り、腹から2あるいは3目盛り離れたところというのはこれとは一致せず、穴の大きさも明記されていない。ACRは21目盛り離れたところに9目盛りの穴を掘るとする。21離れるというのはラトナラクシタの説に、9目盛りの穴というのは、長さのみであるがKRYなどの説に一致している。VAの「胸から

1 ハスタ」「目から1 ダンダ」というのは、他の文献には見られない数値である。穴を掘る部分は「胸の部分」という表現がしばしば見られるが、下方や腹部という説明も現れる。いずれもナーガの身体の胸や腹などに近い部分を掘るという指示であろう。

ACRやタターガタヴァジュラの儀軌は、穴を掘る方法にも細かい規定があったことを伝えるが、それ以外の文献にはこれに相当する記述はない。VAでは「右回りに穴を掘れ」とあるが、これもこの文献にのみ見られる表現である。

ヴァーストゥナーガの名称はACRがシェーシャ、タターガタヴァジュラの儀軌がアナタをあげる。シェーシャはヴィシュヌの神話に登場するナーガの名で、世界創造をするヴィシュヌの寝台となっていることでよく知られている。ヴィシュヌがヴァラーハの化身となって、大地を水の中から救い上げるときにも、シェーシャの上に立つ。いずれも大地を支えるナーガとして理解されていたのであろう。アナタは仏教文献にしばしば登場するナーガのひとつであるが、やはり、ヴィシュヌを乗せるナーガの名称としても用いられることがある。ただし、この二つ以外の文献では、特定のナーガの名称は言及されていない。なお、アナタを含む八大龍王がヴァーストゥナーガの身体の各部を占めていることも、いくつかの文献に見られた。

ヴァーストゥナーガの身体の各部を誤って損ねたときに起きる災厄と、掘り出した土の中に含まれる不純物が、特定の災いに関係することは、ほとんどの文献で言及されている。VAに見られるように、ヴァーストゥナーガの儀礼は「土地の浄化」の一部として行われ、予定地全体を浄化するかわりに、その一部の土を浄化しているのである。実質的な浄化を行うことよりも、あくまでも儀礼的な浄化が行われていることは明らかで、日々位置を変えるヴァーストゥナーガがそのために用いられているのである。

ヴァーストゥナーガが土地の9つの区画を占めて横たわるという記述も、ACR、タターガタヴァジュラとラトナラクシタのマンダラ儀軌に見られる。ヴ

ヴァーストゥナーガの身体の大きさを説明しているように見えるが、具体的にどの単位を用いているのか不明である。文中には土地の各辺を90にわけ、これが穴の位置を示す目盛りにもなっていたが、縦横90ずつに分割すると土地の全体は8100のグリッドとなってしまっていて、このうちの9の区画ではあまりに小さい。10日間分の距離であるその10倍、すなわち各辺を9つに分割して、 9×9 のグリッドを作り、この9区画という解釈も成り立つが、それでもその9区画では、全体の9分の1の面積にしかならず、上半身が人間の姿をしたナーガの形としては小さい。むしろ、各辺を月の数である3つずつにわけ、土地全体を 3×3 の9のグリッドにしてできた9つの区画を指していると解釈した方が自然に思われる。ヴァーストゥナーガが9つの区画を占めるというのは、具体的な占有面積についての情報ではなく、土地を9分割したすべての区画に、身体の一部をのせていることを意図していると理解できる。ヴァーストゥナーガの身体の大きさよりも、9という数がおそらく重要であったと考えられる。

4. 描かれたヴァーストゥナーガ

これまで見てきたヴァーストゥナーガの儀礼は、いずれも密教文献に含まれるものであったが、その伝統は、現代に至るまで生き続けている。

ネパールの伝統的建築を扱ったモノグラフであるJest (1981) には、著者のインフォーマントであるチベット系ネパール人の建築家によるヴァーストゥナーガが紹介されている。それによると、寺院を建設する適切な場所を選択したあとで、そこを 9×9 のグリッドに分割して、地神 (sa'bdag) を描く。そして、所定の位置に穴を掘り、ふたたびその穴を埋め直して、土が余ればその場所はすぐれていると判断される。地神がヴァーストゥナーガに相当するが、その移動方法や穴を掘る位置についての詳しい説明はない。穴を埋めたときの状態で土地の適否を判断することは、これまでのヴァーストゥナーガの儀礼には見ら

れなかったが、建築儀礼で土地を選定するときに広く用いられる方法である⁽²⁰⁾。VAでも寺院建築儀礼やマンダラ制作儀礼の冒頭で言及されている。ヒンドゥーの伝統に属する建築書でもきわめて一般的な選定方法で、逆に土が足りなくなれば不適格とされる。おそらく土の密度を確認するための手続きであろう。ただし、ヴァーストゥナーガの儀礼で掘られる穴が、この判別法で用いられる例は、これまでにあげた密教文献では例がない。本来別々の儀礼が、穴を掘ってふたたび埋めるという共通の内容を持つことから混同されたのかもしれない。

これにつづいて、土中の内容物から土地の適否を判断する方法が述べられている。それほど詳細なものではなく、木片があれば吉祥であるが、石炭が含まれていると火災のおそれがあるという例があげられている。密教文献では木片を含む土地も災厄をもたらすとされていたのに対し、ここでは逆に吉兆とみなしている。

Jestは地神すなわちヴァーストゥナーガを描いた図も同書の中で紹介し、穴を掘る場所も示している(図1)。簡単なスケッチで、おそらくインフォーマントの説明にしたがって著者が描いたものであろう。9×9のグリッドの中に描かれる地神が、上半身が人間で下半身が蛇、頭には龍蓋を付けるところなどは、密教文献の記述に一致している。しかし、左右の手の位置が逆で、穴を掘る位置も左手ではなく右の脇の下となっている。伝承の過程で左右が反転し、穴を掘る位置も不正確となったのであろうか。

1920年生まれの子ベットの人の高僧による寺院建築に関する著作(Jackson 1979)にも、ヴァーストゥナーガが登場する。典拠などは示されていないが、すでにあげた密教文献と

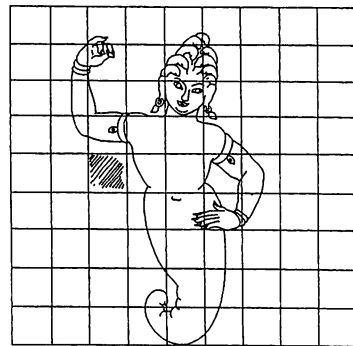


図1 ネパールの建築家による地神
sa bdag (Jest1981: Fig.5)

内容的にはよく一致する。

それによると、土地の区画は一辺が90に分割されるが、はじめに10等分してから、それぞれを9に分ける。はじめから90に分けるのは困難なので、実際にはこのような方法がとられたのであろう。各辺が3か月の日数に対応していることは明記されている。

ナーガの特徴として、上半身が人間で下半身は蛇、左手を左の耳に当て、右手は宝瓶を持って腰に当てることがあげられている。さらに、ナーガの全身が10ヴィタスティの長さを持ち、上半身の龍蓋、顔、胸、胃、下腹がそれぞれ1ヴィタスティずつ、残りの下半身すなわち蛇の部分が5ヴィタスティあるという。全身が10ヴィタスティあるという規定は、タターガタヴァジュラのマンガラ儀軌でも言及されていた。

ナーガの移動の方法は、冬の第1月すなわちカールティカ月に南東の隅からはじめる。これはKRYなどに見られた説に一致する。ただし、開始時期については、乙女座も同時にあげている。カールティカ月であれば射手座かさそり座が適当で、乙女座はバードラ月に相当する。おそらく、実際はカールティカ月を開始時期にしていたが、多くの文献に見られたバードラ月はじまりの説が混入してきたのであろう。

穴を掘る位置や大きさについては、秋の季節を例にとり、東の線から27目盛り離れ、東西に伸びる中心軸から南に向かって13.5目盛り離れたところがまずはじめに示され、そこから西に8.5目盛り、北に(すなわち中心軸に戻るように)4.5目盛りの穴を掘ると述べる。胸の左側に穴は位置することになる。穴の長辺が9ではなく8.5である点を除けば、KRYやタターガタヴァジュラの儀軌に説かれた数値に合致する。

穴の深さは膝までで、土中から不純物を除去することで土地を浄化する。もし不純物があれば、マントラを唱えて浄める。これはディヴァーカラチャンドラの儀軌やVAにも見られた方法である。穴をふたたび埋めるときには、穴の中

に宝を埋蔵することもあげられている。

同書にも地面に描かれるヴァーストゥナーガの姿が紹介されている(図2)。黒く塗ったところが穴を掘る位置で、わかりやすいように東西の中心軸は点線で示されている。文中の記述とはナーガの左右の手が逆で、先ほどのJestの絵に一致する。翻訳者のJacksonは同書の正誤表の中で、誤って反転してしまったと訂正しているが、穴の位置は文中の指示ど

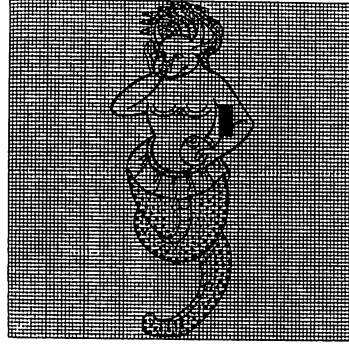


図2 チベット人の描いた地神の蛇
sa bdag klu (Jackson1979 : pl.5)

おりなので、このような向きで伝えられたのかもしれない。

ヴァーストゥナーガの姿を伝える資料として、Palが紹介するロサンゼルス・カウンティ博物館のネパール系の写本が注目される(図3)。Palは占星術に関連する図であると推測しているが、明らかにヴァーストゥナーガを描いたものである。

9×9のグリッドを作り、ここにナーガを描いている。各辺を9分割する線は10日分の移動距離に相当する。正方形の周囲には花卉の形の区画を各辺に3つずつ作り、中に文字を記している。これは、月と十二宮の名称で、たとえば、向かって右の辺のはじめの部分には「カールティカ月、さそり座」と記されている。当然、ヴァーストゥナーガが移動する月を示すもので、右回りに1年分の月と十二宮が示されている。さらに、各辺の中央の花弁には方角も記されて、上を東にしていることがわかる。南東に相当する右上の隅がカールティカ月となっていることから、KRYなどがあげるカールティカ月はじまりの移動方法をとっていたことが確認できる。なお、KRYでは射手座から開始するとあった

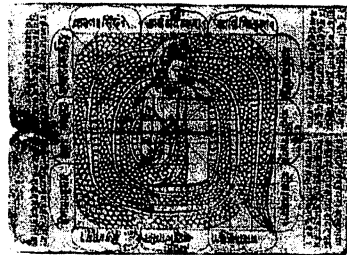


図3 ヴァーストゥナーガを描いた
ネパールの写本 (Pal1985 : pl. D13)

が、この図では右辺の2番目のマールガシーシャ月に射手座は置かれている。月と十二宮は実際には一致せず、この図の作者は一般の対応とはひとつずつずらしたホロスコープを用いていたようだ。

グリッドの中に描かれるヴァーストゥナーガは下半身でとぐろを巻き、その先端が図では南西の隅にある。左右の手的位置は文献に広く見られたものに一致する。穴を掘る位置は示されていないが、ナーガの身体の左側で、上にあげた腕の下にあいている部分が相当するであろう。文献の記述にも合致する。それ以外の部分はすべてナーガの身体で覆われているので、それを損ねないように穴を掘るには、この部分しか残されていない。

この写本はカトマンドウのネパール仏教徒が伝えたものと推測されるが、他にもヴァーストゥナーガを描いた図が同地に伝わっている。Palが同書の中で紹介する別の写本挿絵(Pal 1985: pl.D25 図4)や、Becker-Ritterspach(1982: Abb.20 図5)がそれである。前者はやはり9×9のグリッドを用いているが、全身が蛇の姿で表されている。後者はらせん状にとぐろを巻いたナーガで、尻尾の先が図の中央に置かれる。これまでのヴァーストゥナーガの記述とはいずれも合致しない。なお、前者には次に紹介するヴァーストゥブルシャの図も含まれていて、両者の伝統が共存していたことを伝えて興味深い。

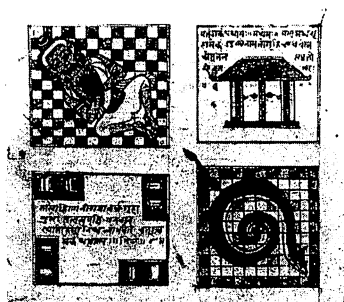


図4 ヴァーストゥナーガとヴァーストゥブルシャを描いたネパールの写本 (Pal 1985: pl. D25)

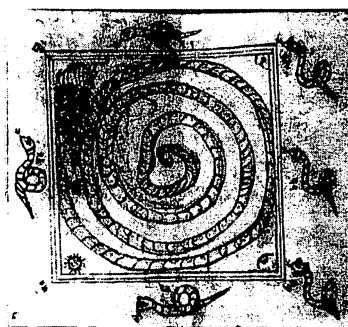


図5 ヴァーストゥナーガ (Becker-Ritterspach 1982: Abb.20)

5. ヒンドゥー建築書に見られるヴァーストゥナーガ

ヴァーストゥナーガの儀礼は、ヒンドゥーの建築書の中でも説かれることがある。

オリッサ地方で9～12世紀頃成立したと考えられる『シルパプラカーシャ』(*Śilpaprakāśa*)には、ナーガバンダ(nāgabandha)と呼ばれるヴァーストゥナーガによく似たナーガが登場する⁽²¹⁾。ナーガバンダも寺院などの建築予定地に描かれ、一年間でその土地を右回りに一周する点も同じである(図6)。バードラ月に北東の隅を起点とするので、おもだった密教文献に説かれた説に一致する。ナーガバンダを地面に描く目的は、その日のナーガの位置から建築物の門の位置を確認することにあっただろう。ナーガが口を向けている方角を、建物の入口とするのである。これに応じて、建物の壁の基礎となる穴を地面に掘る。穴の大きさやナーガの身体の部位との関係などは言及されていない。

『シルパプラカーシャ』と密接な関係を持つ建築書『シルパシャリーニー』(*Śilpaśālinī*)では、このナーガは「家のナーガ」(*grhanāga*)と呼ばれ、やはり入口の位置の決定に用いられた。ナーガの口に門、胸や心臓の部分に建物が位置し、尻尾の方に向かって広がる。さらにこのナーガは「時の蛇」(*kālasarpa*)とも呼ばれる。360の骨、6つの関節、12のとぐろを持ち、これらは順に、日、季節、月にそれぞれ対応している。また上半身の黒い部分は夜、下半身の明るい部分は昼を表すという。一年という時間と結びついたナーガの特徴をよく示している。

ヒンドゥーの寺院建築に関する古典的な研究書“*The Hindu Temple*”の中で、著者のS. Kramrischは断片的

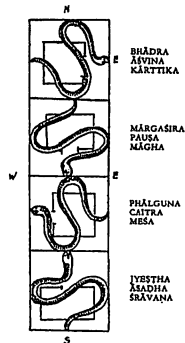


図6 ナーガバンダ
(Boner & Śarmā
1966 : Fig.2)

にヴァーストゥナーガについて言及している。彼女はこのナーガがヴィシュヌの創世神話と関連し、アナントあるいはシェーシャとみなすのが適当であると述べた上で、『ヴァーストゥヴィドヤー』(*Vāstuvidyā*)という文献に含まれる情報として、ヴァーストゥナーガが建設予定地を一年で一周することを紹介する⁽²²⁾。その開始時期と場所はバードラ月に北東の隅である。また、占星術書の『ジュヨーティシャ・シャーストラ』(*Jyotiṣaśāstra*)では、乙女座、天秤座、さそり座のときに東に頭を向け、以下、右回りに進むと紹介するが、これもバードラ月はじまりの方式を十二宮で示したもので、同一の説である。さらにKramrischはN. K. Basuの‘Canons of Orissan Architecture’からの引用として、このナーガの身体が8ないし9の部分に分かれるという。そして、そのうちの心臓か胃の部分に、建物の礎石を安置すると述べる。Basuが依拠するBhuvanapradīpaという文献については未詳であるため、原文は確認できないが、『シルパプラカーシャ』に見られたナーガの胸や腹の位置に建物を建てることとの関連が推測される。また、ヴァーストゥナーガの儀礼で胸や腹の近くに穴を掘ることとも、何らかのつながりがあるのかもしれない。

南インドで権威を持っていた建築書『パードマ・サンヒター』(*Pāḍmasaṁhitā*)には、ヴァーストゥナーガそのものは登場しないが、カータ・ホーマ(khātahoma)という興味深い儀礼を含んでいる⁽²³⁾。寺院などの土地を選定し、土地の浄化や儀礼的耕作が行われた後に、この儀礼は行われる。寺院の中心となるガルバグリハ(garbhagrha)の予定地に穴(カータ)が掘られ、穴の中に水瓶を安置し、さらに大地を支える力を象徴したさまざまな像をその水瓶の中に入れる。最後にもう一度穴は埋められ、次の儀式へと移る。

『パードマ・サンヒター』が説く寺院のガルバグリハは、土地の区画全体を9×9のグリッドで分割したうちの、中央の9区画に相当する。ここに1ダングの深さの穴を掘り、穴の底に9つの水瓶を置く。中心にひとつ、そのまわりに8つであるので、ちょうど3×3のグリッドにひとつずつ置かれることになる。

さらに中央の水瓶の上に3つの水瓶を重ねて置く。このうち、一番上の瓶には野猪になって大地を支えたヴィシュヌ、2番目にはヴィシュヌが乗るナーガであるアナタ、3番目には亀とカーラアグニ (kālāgni) の像がそれぞれ入れられる。土地を支えるさまざまな神格の像が、土中に埋められ、その中にはアナタも含まれている。寺院の中心であるガルバグリハの下であることも、世界の中心に位置して、それを支えていることと理解できる。なお、カータ・ホーマという儀礼の名は、儀礼の中でホーマ（護摩）を行うことに由来するが、儀礼の中心は穴を掘り、水瓶を埋蔵することにある。

ヒンドゥーの建築術の伝統では、建築予定地に描かれるものとしては、ヴァーストゥナーガよりもヴァーストゥプルシャ (vāstupuruṣa) がよく知られている。「敷地の人」を意味するヴァーストゥプルシャについては、そのコスモロジカルな意味がこれまでも詳しく研究されてきた⁽²⁴⁾。ヴァーストゥナーガとヴァーストゥプルシャの決定的な違いは、前者が日々その位置を変える、時間と結びついた存在であるのに対し、後者は動くことはなく、あくまでも空間的な表象として理解されていることであろう。しかし、両者に共通する点もいくつかある。寺院などが建築される前に地表に描かれ、しかもそのために9×9のグリッドが用いられる。またヴァーストゥプルシャの身体には9つの「大急所」があるといわれ、実際に建物を建てるときには、この9箇所をはずして石を置いたり、穴を掘ったりすることが求められる。地表に描かれた身体の部位が、実際の建築物の構造や作業の工程を支配するのである。これはヴァーストゥナーガ儀礼でナーガの身体の部位を誤って損なうことが、強く戒められたことを想起させる。

6. ヴァーストゥナーガ儀礼の変容

密教の儀礼文献を中心に、ヴァーストゥナーガの儀礼を概観してきた。寺院

などの建設予定地に描かれるヴァーストゥナーガは、その区画全体に横たわり、日々少しずつ移動することによって、一年かけて一周する。ヴァーストゥナーガの身体の位置を基準として、所定の穴を掘り、土中から不純物を取り除くことで、敷地全体の浄化が行われる。しかし、類似の儀礼を説くヒンドゥーの建築書は、建物の方向を決定したり、その基礎となる穴や石の位置を知ることとも儀礼の目的としている。

この儀礼ではヴァーストゥナーガは単なるナーガではなく、コスモロジカルな性格を持った存在としてとらえられている。ヴィシュヌの創世神話に登場するシェーシャやアナントと同じ名で呼ばれることも注目される。大地すなわち世界を支える動物として、ヴァーストゥナーガは意識されているのである。そして、一年という時間のサイクルと結びついたヴァーストゥナーガは、空間のみならず時間をも統轄する表象として、儀礼の主役を果たしている。

ヴァーストゥナーガが時間と結びついていることは、右回りに日々進んでいくことによっても、明確に示されている。右回りは太陽の運行をはじめとして天体現象の基本的な進行方向である。天文学や暦学の基本である月や黄道十二宮、星宿などによってその位置が決定されることも、同じ理由からであろう。

ヴァーストゥナーガが移動を開始する時期は、バードラ月とカールティカ月の二説があった。ヒンドゥーの建築書がいずれもバードラ月はじまりとし、密教文献の多くもこの立場をとることや、Jacksonの紹介するチベット人の著作では、カールティカ月はじまりとしながらも、十二宮の名称は、バードラ月に相当する乙女座であったことなどから判断して、おそらく本来はバードラ月はじまりであったものが、カールティカ月となったと考えられる。インドを中心とする南アジアの暦の世界では、カールティカ月を新年のはじまりとする地域や時代がある。とくに、ネパールでは、古くはカールティカ月が一年のはじまりとなっていた⁽²⁵⁾。おそらく実際の年の周期に合致させるために、ヴァーストゥナーガの移動開始の時期もカールティカ月に変えられたのであろう。そして、

それまでのバードラ月はじまりの位置にできるだけ近いように、北東ではなく南東をその起点としたと推測される⁽²⁶⁾。

このように、儀礼を行う日にしたがってヴァーストゥナーガの位置を厳密に規定しているのに対し、それを基準とした穴の位置は、文献間で一定しない。さらに、文献によってはあいまいな表現をとることもあった。密教文献が説くように、ヴァーストゥナーガの儀礼の目的が土地の浄化であるならば、掘る穴の位置や大きさ、深さなどは、ヴァーストゥナーガを傷つけることがなければ、むしろそれほど重要な意味を持たないように思われる。任意の場所を儀礼的に掘って、土を浄めることで土地全体の浄化が完成するとみなされている。これに対し、ヒンドゥーの建築書に見られたヴァーストゥナーガ儀礼の目的には、建物の位置や方角を決めることもあげられ、建物の構造そのものと密接に結びついていた。しかし、これは建築儀礼であれば重要であるが、マンダラのようにすでに構造が確定し、その方位も変更が認められないものを作る場合は意味をなさない。礎石の安置や基礎の穴を掘ることも、地表に砂マンダラを描くときには必要ない。密教儀礼としてのヴァーストゥナーガの儀礼では、穴の位置よりも穴を掘るときにナーガを傷つけないことや、土中から不純物を除去することに重点が置かれていた。コスモロジカルな存在であるナーガを傷つけることを戒め、それを浄化することが強調されている。

インド世界の建築儀礼において、土地と結びついたコスモロジカルな存在は、これまでヴァーストゥプルシャがよく知られていた。一方、ここで取り上げたヴァーストゥナーガは、これまで断片的に紹介されてはきたものの、その詳細はほとんど明らかにされていない。しかし、ヒンドゥーの建築書のみならず、密教の儀礼文献において、パラレルな構造を持つ建築儀礼とマンダラ制作儀礼に、このヴァーストゥナーガは共通して登場し、さらに、ネパールやチベットでは実際の寺院などの建立において、その伝統が現在に至るまで生きている。その儀礼の目的は、長い時間の中で変化をこうむっていることが、これらの文

献の内容から推測できるが、一年という時間を表象する独自のコスモロジカルな存在として、建築予定地という空間に結びついていることはつねに一貫している。

- 1 マンダラの構造と機能については拙著（1997）参照。同書ではヴァーストゥナーガの儀礼についても簡単な説明を行った。
- 2 「受胎の儀式」という名称は小倉（1999）による。
- 3 後述するように、ヴァーストゥナーガの儀礼についてはKramrisch(1946：vol. 1, pp.62-3；vol.2 p.90), Jest（1981：27-28）, Lessing & Wayman（1978：280-1）, Jackson（1979：30-33）, Brauen（1998：76, 132）が断片的に紹介している。
- 4 以下に示す密教文献からのヴァーストゥナーガに関する記述のうち、VA, ACR, KRYの3点はサンスクリット写本とチベット訳テキストを参照した。このうち、サンスクリット・テキストの該当箇所として、Śatapīṭaka Seriesのページ数を、引用文の末尾に示した。これ以外の文献はサンスクリット・テキストが現存しないため、チベット訳テキストを用い、その該当箇所を北京版について同様に示した。なお、これらのテキストの原文は紙幅の都合で、別稿として発表を予定している（森 2003）。
- 5 1ハスタ（hasta）は棟梁の腕の長さを基準とするが、約50cm。
- 6 1ダンダ（daṇḍa）も長さの単位で、約2m弱。
- 7 『蔵漢大辞典』は「墻基」「墻脚」という意味をあげる。
- 8 長さの単位で1 ヴヤーマ（vyāma）は肘から中指の先までの5倍。
- 9 吉崎一美氏のご指摘による。
- 10 梵線（brahmasūtra）はマンダラを描くときの基本線で、マンダラの中心で縦横に垂直に交わる2本の線。梵線を含むマンダラの基本線については拙著（1997：122）参照。
- 11 小倉（1999：175-6）参照。
- 12 八大龍王についての記述は後掲の文献でも同一の内容を持つ。ナーガの身色については『ニシュパナヨーガーヴァリー』の第11章「ヴァジュラフーンカラ・マンダラ」の中にも含まれるが、こことは一致しない（森 1996：102）。
- 13 『真言道次第』に含まれるヴァーストゥナーガの儀礼については、拙稿（2003）

としてテキストと翻訳を発表する。

14 TTP, Nos.2213, 2214, 2215.

15 1 ヴィタスティ (vitasti) は手首から中指の先までの長さで、1 ハスタの半分の長さ。

16 以下の「一日に移動する距離」と「穴の位置と大きさの具体例」で示される数値の一部は、サンスクリット・テキストとチベット訳との間でかなりの違いがある。文献の規定に比較的よく合致するチベット訳の数値を、原則として示す。

17 森 (1995 : 111)

18 この前の段落でヴァーストゥナーガは大日の自性を持つという記述がある。ナーガに関連する儀礼でヴァルナと大日を重ねる見方は、VAの「池などのブラティシュター」にも見られる (森 1995 : 47)。

19 「秋の第一、第二、第三の月には」と読むべきところであるが、テキストに従う。

20 小倉 (1999 : 169), 森 (1991 : 61, 66)。

21 Boner & Sadāśiva (1966 : 14—5, 131—2)

22 『ヴァーストゥヴィドヤー』に含まれるナーガの移動法についての記述は以下の通りである (Ganapati Śāstri 1913 : 34)。

乙女座の時に、蛇は東を頭に、南に尻尾を向けて横たわる。

射手座の時に、南を頭に、西に尻尾を、魚座の時に西を頭にする。

そして、双子座の時に西に尻尾を、同様に、北に頭を

東を尻尾にして、このように12か月の順序どおりに移動する (第6章、第2, 3偈)。

(kanyāyāṃ pannagaḥ śete prākchirā yāmyapucchakaḥ /
cāpe yāmyaśirāḥ pratyakpuccho mīne parākchirāḥ //
udakpuccho 'tha mithune saumyakeśas tathaiva ca /
prācīpuccho luṭhaty evaṃ māsair dvādaśabhiḥ kramāt //)

参照したテキストには、マラヤラム文字の数種の写本にもとづくことが、校訂者によって示されているが、成立年代や学派などのそれ以外の情報は明らかにされていない。第6章の第4偈以降はヴァーストゥプルシャについての説明で、身体の支分 (aṅga) に柱を置いてはならないという規定が示される。ヴァーストゥプルシャが「大急所」を持つことについては後述する。

23 小倉 (1999 : 176-180) による。

- 24 Kramrisch (1946), Apte & Supekar (1984), 小倉 (1999) など。
25 矢野 (1992: 167-170) による。現在のネパールではヴァイシャカ月が一年のはじまり。
26 このことはKRYの成立地についても示唆を与える。ネパール仏教で重視されたKRYは、原文はサンスクリットであるが、作者のクラグッタがネパールのパンディットの名として他の文献に現れることなどから、インドではなく、ネパールで成立した可能性も指摘されてきた。カールティカ月はじまりがネパールの暦によるものであるとすれば、KRYの成立もネパールであったと考えるのが妥当であろう。

略号

ACR: *Ācāryakriyāsamuccaya*.

KRY: *Kriyāsaṃgaraha-pañjikā*.

TTP: Tibetan Tripitaka, the Peking edition. 『影印北京版西藏大藏經』 鈴木学術財団。

VA: *Vajrāvālī-nāma-maṇḍalopāyikā*.

文献

- Apte, P. P. & S. G. Supekar 1984 *Vāstupuruṣamaṇḍala in the Pauskara-saṃhitā and Bṛhat-saṃhitā*. In K. K. A. Venkatachari (ed.), *Agama and Silpa*, Anantha-charya Indological Research Institute, pp. 132-148.
Becker-Ritterspach, R. O. A. 1982 *Gestaltungsprinzipien in der Newarischen Architektur: Beitrag zur Konstruktion und Formgebung*. Hamburg.
Boner, Alice & Sadāśiva Rath Śarmā 1966 *Śilpa Prakāśa, Mediaeval Orissan Sanskrit Text on Temple Architecture*. Leiden: E. J. Brill.
Brauen, M. 1998 *The Mandala: Sacred Circle in Tibetan Buddhism*. tr. by M. Willson. Boston: Shambala.
Jackson, David P. 1979 *Gateway to the Temple: Manual of Tibetan Monastic Customs, Art, Building and Celebrations*. Kathmandu: Ratna Pustak Bhandar.
Jest, Corneille 1981 *Monuments of Northern Nepal*. Paris: UNESCO.
Kramrisch, Stella 1946 *The Hindu Temple*, 2 vols. Calcutta: University of Calcutta.
Lessing, F. D. & A. Wayman 1978 (1968) *Introduction to the Buddhist Tantric*

- Systems*. Delhi: Motilal Banarsidass.
- Lokesh Chandra (reproduced) 1977a *Kriyāsamuccaya*. Śata-piṭaka Series, Indo-Asian Literatures Vol. 237. New Delhi: International Academy of Indian Culture.
- Lokesh Chandra (reproduced) 1977b *Vajrāvalī: A Sanskrit Manuscript from Nepal Containing the Ritual and Delineation of Maṇḍalas*. Śata-piṭaka Series, Indo-Asian Literatures Vol. 239. New Delhi: International Academy of Indian Culture.
- 森 雅秀 1991 「インド密教における建築儀礼——*Vajrāvalī-nāma-maṇḍalopāyikā* 和訳(1)」『名古屋大学文学部研究論集』111: 53-73。
- 森 雅秀 1995 「インド密教におけるプラティシュター」『高野山大学密教文化研究所紀要』9: 27-65 (横組)。
- 森 雅秀 1996 「『完成せるヨーガの環』第11章「ヴァジュラフーンカーラ・マンダラ」訳およびテキスト」『高野山大学創立百十周年記念 高野山大学論文集』pp. 101-124。
- 森 雅秀 1997 『マンダラの密教儀礼』春秋社。
- Mori, M 2003 The Vāstunāga ritual described in Tsong-kha-pa's *sNgags-rim chen-po. Felicitation Volume to Prof. Dr. Musashi Tachikawa*. Delhi: Motilal (in press).
- 森 雅秀 2003 「密教文献に説かれるヴァーストゥナーガ」『高野山大学密教文化研究所紀要』16 (印刷中)。
- 小倉 泰 1999 『インド世界の空間構造』東京大学東洋文化研究所。
- Pal, Pratapaditya 1985 *Art of Nepal: A Catalogue of the Los Angeles County Museum of Art Collections*. Los Angeles: Los Angeles County Museum of Art.
- Sharada Rani (reproduced) 1977 *Kriyāsaṃgraha*. Śatapiṭaka-Series, Indo-Asian Literatures Vol.236. New Delhi: International Academy of Indian Culture.